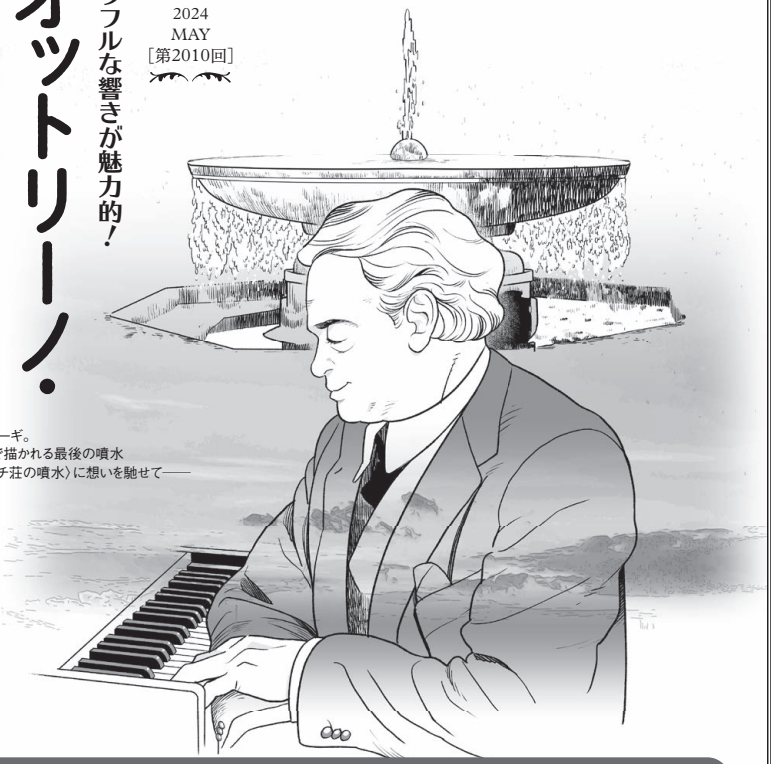
イタリア・ボローニャの音楽学校でヴァイオリンとヴィオラ、音楽史、作曲を学んだレスピーギは、20代前半の頃、サンクトペテルブルクの帝室劇場でヴィオラ奏者として活躍。このときにロシアの大作曲家リムスキー・コルサコフに師事し、華麗な管弦楽法を身につけた。その後、作曲家へと転身、ドビュッシーなどの色彩豊かな音楽からも影響を受けて書かれた出世作が、「ローマ三部作」の1作目《ローマの噴水》だ。晩年は指揮者として、また声楽家の妻の伴奏ピアニストとして、自作の演奏活動にも注力した。

A
2024
MAY
［第2010回］

カラフルな響きが魅力的！

オットリーノ・レスピーギ

Ottorino Respighi（1879–1936）



ピアノを弾くレスピーギ。
《ローマの噴水》で描かれる最後の噴水
〈たそがれのメディチ荘の噴水〉に想いを馳せて——
イラストレーション：©IKE

古典へのまなざし

レスピーギは学生時代から古（いにしえ）の時代の音楽にも深い関心を寄せ、そうした古風な要素を自作品に巧みに取り入れていた。ローマ・カトリック教会の典礼音楽、グレゴリオ聖歌の旋律が登場する《ローマの松》の第2曲〈カタコンブ付近の松〉はその好例。一条の光のように鳴り響くトランペットの調べは美しく、心に染みる。